とある魔術やら科学と問題児

軒下 久杉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。駄文です。

「とある魔術の禁書目録」や「とある科学の超電磁砲」に「問題児たちが異世界から来るそうですよ?」の主人公、逆廻十六夜をクロスさせたくて書きました。

逆廻十六夜はラストエンブリオ直前ぐらいの強さです。

とあるは既に読んでいることを推奨しますが、逆廻十六夜については出来るだけ知らない人でも読めるようにしたいです。問題児の方については色々と調べたりもしたのである程度なら答えられます。

とあるについては、とても詳しいという訳では無いので、時々間違った知識とか言葉

がありましたら、伝えてくれると幸いです。
この作品はどれぐらい続けるかは分かりません。
のんびりやっていきます。

目次

プロローグ ―― 1
十六夜の新たな生活 ―― 11
不幸と幸運 ―― 24
逆廻爆発事件 ―― 37

プロローグ

「…ですか…？」

気持ちよく睡眠をしていると、どこからか声が聞こえてくる。なんて言っているんだ。

朦朧としていた意識はゆっくりと覚醒していく。

「大丈夫ですか…？」

今度ははっきり聞こえた。どうやら、人の安眠を邪魔しに来ているようだ。ちょっとばかり不機嫌になりながらも、初めて聞く声なので、起こしてきた人物は誰なのかとゆっくりと目を開ける。

「…んだよ？」

「あ！…気がついた！」

目の前にはお花を頭につけ学校の制服らしきものを着ている人がいた。

訳が分からず目を擦り、二、三度瞬きした後、もう一度しっかりと顔を見つめる。そこでおかしな点に気付く

（どういうことだ…？）

目の前の女生徒らしき人は、どう考えても日本でよく見る学生服を着ている。ただのコスプレってわけでもなさそうだった。

あたりを見渡すと、今自分がいる場所はどこかの公園の芝生の上で、周囲には目の前の女性とは違う制服を着ている人や、社会人として当たり前のスーツを来ている人がいる。

極めつけは高層ビルがいくつも見え、さらに車まで走ってるときた。

俺はたしか白夜叉という和服を着た見た目ロリっ子のババアに許可をもらって、白夜叉が所有している本を読み漁っていたはずだ。あらかた読み終わり、休憩として寝ていて、目が覚めたら全く別の場所。むしろ室内ではなく外。

どうしてこんなところにいるのかは分からないが、どうやら元いた世界とはまた別の世界に二度目の異世界転生でもしたということだろうか。

「あ、あのぉ…私の顔になにかついていますか…？」

目の前の名も知らない少女は少し顔を赤くして視線をそらした。

そういえば状況を飲み込むのに多少の時間がかかり、特に意識をしていた訳では無いが彼女の顔を見つめていたままだった。

「あぁ、綺麗な顔ってぐらいだな」

とりあえず適当なことを言うと、少女はさらに顔を赤くしてしまった。そんなことは

さておき色々と確認してみたいことがあるので少女に色々と質問してみることにした。
「お花少女。俺は逆廻十六夜だ。一つ確認したいんだがここはどこだ？」
「お花少女って私ですか…？」
「お前以外に誰がいる…」
　そんな特徴的な格好をしておいて、他にも同じことをしている人がいたら正直この世界の常識を疑う。幸いにも頭に花をつけているのは少女だけなのでよかった。
「私は初春飾利と言います。もしかしてこの学園都市の外から来たのですか？」
「んーまあそんなところだ」
「なら簡単にここのことについて説明しますね」
　初春という子の話を簡単にまとめると、
　ここは学園都市と呼ばれる人口２３０万人が住む都市らしい。
　ここの学園都市と呼ばれる敷地内は、学園都市の外よりも二、三十年進んだ技術力を誇るらしい。
　さらには超能力というものが存在しており、ｌｅｖｅｌ０からｌｅｖｅｌ５までと能力の強さによって位分けされ、ｌｅｖｅｌ５に至っては一人で軍隊レベルの強さを持ち、この学園都市にも七人しかいないとされるすごい存在らしい。
「へー、ところで今って何月だっけ」

「二月の終わりですよ！だから、こんなまだ寒い時期にも関わらず外で倒れるように寝ている逆廻さんを見て、心配して声をかけたんです！」
「あー心配かけて悪かった…」
見知らぬ人間なのにここまで優しくしてくれる初春に最初に会えてラッキーだったかもしれない。
まあこの世界に来てしまったことは幸か不幸かまだ分からないが。
「ありがとな。色々教えてくれて、ちょっくら散歩してくるわ」
「はい！気をつけてください。あ、またなにか困ったことがあったらコチラに」
「親切にどうも」
別れ際にメールアドレスをもらった。
ここからはいつ元の世界に戻れるかも分からないので、とりあえずこの世界で生きていくために色々と準備をしなければならない。
まず今持っているものを確認してみよう。
ポケットを漁るとまず最初にギフトカードを取り出した。
このカードは所謂四次元ポケットでもある。
所持している恩恵（ギフト）、こちらの世界では異能にあたるものを確認すると、おかしなものが入っていた。

（なんだ、この「十六夜」って…もしかして白夜叉のような自分のゲーム盤。自分の異空間を作れるのかな…？あとで試すとしよう）

続いて出てきたのは身分証明証。俺の名前、顔がある。

いやなんでだよ。なんで持ってるんだ。ありがたいけどさ…

次に、取り出したのは通帳。

だからなんで持ってるんだ…

中身を開いてみるとまさかの俺名義である。お金は…なんかすごい桁だが、もしかしてここはインフレでもすごいのか…？

そうじゃなければ当分お金には問題ないだろう。

持っていたものはこれだけだった。だが、お金はあるので家を買えそうだし、さらには戸籍もちゃんとあるので一番めんどくさいところがどうにかなっていた。

（ここに俺が呼ばれたのは誰かが意図的にってことか）

（ま、何はともあれまずは家を買い、情報収集だな）

色々と頭の中で思考を巡らせながら街を歩いていく。

ー数週間後ー

かなりたくさんの情報を集めた。

この世界が地球、いやむしろ全く同じだったり。案外ここはこれだけの警備が敷かれ

ていながら治安が悪かったり。現在存在する超能力を調べたり、と。
情報収集をしている間ホテルなどで暮らしたりしたが漸く家も買った。
どのぐらいこの世界に居るのかも分からないので贅沢はせず、マンションの一室を借りることにした。
ちなみにだが、お金は普通にバグを起こしてるレベルで金持ちだった。
「さて、必要なものはこんな感じかな」
日常品を色々と購入して自分で設置していく。
「明日は初めてのシステムスキャンか…」
この学園で最も重要とされる超能力の強度を調べるものだ。
と言っても、どうせ自分の能力はラプラスの悪魔ですら分析することが出来なかったのだから、たかが機械ごときで測定できるわけもないが。
おっと、いけない。引越しというか、家を購入したことだし隣人に挨拶するか。
家を出て、そこら辺で買った食べ物を持ち、隣の部屋のインターホンを押す。
「はいはい、どちら様ですか?」
少ししたあと中からツンツンな髪の毛をした青年が出てきた。
「隣に引越してきた逆廻十六夜だ。よろしく」
と、同時に食べ物を渡す。

が、少年は固まっている。
（なんだ？ここの世界ではもっと別の品を選んだ方がよかったのか？）
お互いに少し固まったままのあと漸く相手が動き出す。
「あ、あなたが神か…？！」
「十六夜様だ」
「ありがとう！本当にありがとう!!まともな食べ物がなくて困ってたんだ!!」
ボケてみるも、それすら一切気にしないあまりの勢いに思わず軽く引く。コイツはよほど苦しい生活をしてきたのだろうか。もしかしたら、前の世界にいたコミュニティより酷い生活をしていたのかもしれないと少し暖かい目をする。
「あ、俺は上条当麻と言います。よろしく！」
と握手を求められたので握り返す。
「この学園都市に来て間もないから、何かあった時は頼らせてもらうぞ」
「そうなのか。この上条さんにまかせなさい！」
そんなこんなで軽く雑談したあと、部屋に戻る。
そしてさっきの出来事を振り返る。
レベル０の能力無しと言っていたが、なんか腑に落ちない。握手した瞬間違和感を感じたし、何か隠してることでもあるのか…？

だがまあ人が良さそうな奴だし、これでも人を見る目はあると思っている。これで飛んだ食わせ者だったらそれはそれで面白い。

「ヤハハ、案外この世界も、最初にいた退屈な地球より楽しそうだなオイ！」

その日もテレビやネットによる情報収集をした後、睡眠をとり明日に備えた。

ー翌日ー

所変わって今いる場所は研究所である。システムスキャンをするために訪れた場所だ。

「んー君は機械じゃ何も出なかったんだが、なにか特殊な力はあるかい？」

研究員のジジイが尋ねてくる。

「あぁ？ま、身体能力はズバ抜けて高いぜ」

「じゃあ肉体強化か何かを持ってるか、それとも一般人に比べたら良いって事なのか…とりあえず、身体能力を測ってみようか。グラウンドがあるからそっちに行こう」

そう言われたのでそのままついて行った。

入口とは逆の場所に設置された扉から施設を出ると、陸上の競技場のような広い場所があった。

「じゃあまずは１００ｍでも測ってみようか。準備体操が必要なら待つけどどうだい？」

「いらねーよそんなもん」
「そうか、じゃピストルの合図とともに向こうから走ってきてくれ」
りょーかい、と気だるく返しスタート地点まで歩いていく。スタート地点にはさっきまで一緒にいたジジイとは違う、女性が立っていた。
きっと俺の測定のためにわざわざ手伝わされているのであろう。
女性に被害が及ばないようにできるだけ離れた場所でスタート位置につく。
「それじゃあ行くわよ」
思えば１００ｍ走なんて何年ぶりだろうか、いつも死ぬほど手を抜いてたことだしたまには少しスピードを出してもいいか、なんてことを考えながら構えなんて取らず普通に立ったまま合図を待つ。
「よーい」
パンッ！
合図と同時に足に軽く力を込め走るというより前に跳躍する。
そして一瞬にしてジジイの前につく。ジジイは目を点にしていた。
それもそのはずである。
十六夜は普通の状態で本気で走ったら第三宇宙速度、約１６．７ｋｍ／ｓで走ることが出来るので、たとえ手を抜きまくったとしても０．１秒すらかからない。人間がス

トップウォッチ程度で測れる訳がない。
スタート地点を見てみると踏み切った場所は軽く抉れ、地面に小さなクレーターが出来ていた。
「は、はは…」
ジジイは固まったままだった。
その後も色々と測定して言ったのだが全て測定不能。なんともつまらない結果で終わり、結果は後日報告とのこと。
施設をただの測定で半壊させてしまったが、俺の能力を甘く見たあいつらが悪いと、特に罪悪感も感じずに帰る。

結果はｌｅｖｅｌ５となった。
能力がほとんど不明だが、実力的には確実にｌｅｖｅｌ５以上。
だが、なんの役に立つのかは誰も一切分からないので順位は最下位とされた。

十六夜の新たな生活

そろそろ五月も終わりが近く、残り数日で六月へと入る今日この頃。
この学園都市については三ヶ月もいたのである程度のことはすべて覚えた。
俺がｌｅｖｅｌ５と認定されたことはまだあまり世間にバレてはいないが、知られ始めたら何かと面倒なことが起こるだろう。いや、正確にはかなり新しくｌｅｖｅｌ５到達者は出たという事は噂されている。ただ俺の姿まではわからないってことだ。
ちなみにだが元の世界に戻る方法は未だ手がかりすら掴めておらず、完全に手詰まり状態であった。
一つ可能性があるとしたら、この学園で一番偉いとされるアレイスターとかいう野郎に会うことだがその方法もない。
なんて考えていると突然携帯がなった。
未だ交友関係が広くない俺に誰からだと思い見てみたら、全く知らない番号だった。
なにかの通販か、などと思いながら電話に出てみる。
「もしもし」
「やあ、初めまして」

道端であった人とかいう可能性も考えていたが、本当に一切聞いたことのない声だった。
「誰だお前、悪いが通販とかはお断りだぜ」
無駄に手間を取らされたな、などと考えつつ電話を切ろうとした。
「待ちたまえ。私はアレイスター＝クロウリーという者だ」
即座に電話を切るのを止める。そして、思考を切り替え自然と真面目な目付きになる。こちらが会いたがっていた相手がわざわざ連絡をよこしたのだから。
「これはとんだビッグネームだな。どうせ知っているだろうが一応名乗るぜ。逆廻十六夜様だ」
「ふふ、礼儀正しいやら悪いやらよく分からんやつだな」
「これが礼儀正しいと思うなら、お前はよっぽど頭のおめでたいやつだな」
さて、どうでるか。聞き出したいことは色々とあるがまずは用件でも聞いてみるか。
「んで、なんでかけてきたんだ。ただの挨拶って訳でもねーんだろ」
「まあ半分は挨拶も含まれて居るんだがね。何しろ突然この学園内に現れて、さらに強大な力を持っている。興味がない訳なかろう」
「ハッ！そいつはどーも」
今の話を聞く限り、向こうも俺がこの世界に来た理由を知らないのか…？

だが、突然現れたということを見られてたのならその時の状況はいずれ聞き出せるだろう。

もしかしたら、空間転移によって遠くから突然出現したってことも考えられている可能性はあるのか？いや、だがずっと監視されていたとすると俺がそんな能力がないのもバレているか。てか、監視されていたって思うと気味悪いなコイツ。

「さて、用件の方だが大したことではない。私が君を必要とした時にちょっとばかり働いて欲しいのだよ」

「俺のメリットはなんだ？それ次第でのんでやるよ」

「この都市内全てのアクセス権限なんてどうだい？」

…なんだと

この都市内は全てのものがほとんど機械に頼っている。この学園が所有する全ての情報だって手に入るだろうし、様々なセキュリティだって突破できる。最悪この学園都市を滅茶苦茶にすることだって可能だろう。

「オイオイいいのか？俺は問題児と呼ばれた男だぜ。この学園がどうなっても知らないぞ」

「なに、別に君ほどの者なら悪用なんてせずとも簡単にこの学園を落とせるだろう。私は君を高く買っているつもりだよ」

確かに俺が持つ星を砕く一撃と称されたほどの奥の手を使えば、この星ごと壊せるだろう。まあ壊したあと生き残れる自身はないが。
「一体どんな無理難題を押し付けるつもりだ…？」
「君の力を調べたいだけだよ。それにどうせ君は元の世界に帰るのだろう？まあそれでも信じることは出来ないだろうから君に拒否権も与えよう」
異世界から来たことは知ってたのか。てかつくづく上から目線でムカつく野郎だな…いっぺんぶん殴りてぇなおい
少しだけ携帯も嫌な音をたてている。
「付け加えるなら、命令を飛ばすことは滅多になかろう。君がこれから調べる情報で面白そうな事件があったら、勝手に首を突っ込んでいくだろう？」
否定はしない。問題児と言われる俺は快楽主義であり、面白いことにはいつも参加してきたのだから
「っち、そこまでされるならのんでやるよ。こっちも用ができたら今度はお前の目の前まで会いに行くから、覚悟しとけよストーカー野郎」
「ストーカーとは心外だね。まあいい、君の実力。楽しみにしているよ？」
それだけ聞くとこっちから電話を切る。
そして大きなため息もつく。

俺の座右の銘である、天はオレの上に人をつくらず。に反している時点でもかなり気に入らないのに、あの達観した態度が本当にウザイ。

元の世界に帰る前に是非とも一度跪かせたいものだ。

一つだけ不思議なのは、なぜ三ヶ月も接触をしてこなかったって事なのだが、まあ考えても無駄か。

少しした後、全てのセキュリティを外すことの出来る権限が届き、早速さらなる情報集めをした。

その中にはいくつも気になる超機密事項的なものすらあることにはかなり驚かされた。

情報を集めるついでに情報操作もしておいた。俺の名前とｌｅｖｅｌ５ってことぐらいしか分からないようにしたことや、年齢をちょっくら弄ってｌ５歳ということにしたりといろんなことをしておいた。

年齢を弄った理由だが、情報を集めた結果、面白い事がおきそうなやつが身近に一人いたので、そいつに合わせただけである。

ー数日が経過し六月に入るー

「はー寝み」

毎晩遅くまで情報を色々と調べているせいでとにかく眠い。なにやらこの世界は、科

学だけでなく魔術もあるらしくかなり興味深くつい色々と調べてしまった。
それはともかく俺は現在いつも通り学生服を来ていることは変わりないが、学生カバンも持って歩いている。
そう、俺は高校一年生となったのだ。
入学する高校は隣人である上条当麻のいる学校。
ちなみにだが、入る時ｌｅｖｅｌ５ということも伝えたらあっさり許可を貰えた。
何年ぶりかの高校でどう過ごそうかな、などと考えながら近道をしようと路地裏を歩いていると、ちょうど十字に分かれるところで、いかにもチンピラらしい奴が一人正面に立っていた。
「オイオイ兄ちゃん。こんな所を通るなんてついてねぇなぁ?」
確かについてない。時間の無駄だ。
そして相手もついてない。俺は今眠いせいで少し苛立っているのだから
「へへへ、命が惜しけりゃ持ってる金を全部寄越しな」
様々な武器を持った連中がニヤニヤしながら四方向全部からどんどんチンピラが出てくる。
まるでゴキブリのようである。
ため息を付きながら財布を取りだすと、野郎共はみんなまだ受け取ってすらいないの

に満足そうな顔をしている。
　俺は財布を取りだすとそのまま渡すのではなく、十円玉を四枚取り出す。
「ああ? 何やってんだオメエ。財布ごと寄越せって言ってんだ」
　ニヤっと笑いながら相手全員を見やる。
「オラよ!! 俺からのプレゼントだ! たっぷり受け取れよ!!」
　そして、持っていた十円玉をそれぞれの足元に向かって放り投げた。
　流石に第三宇宙速度で投げてしまうとクレーターが出来、あたりのビルが倒壊しかねないのでかなり力は抑えた。だがそれでも地面のコンクリは抉れチンピラ達は全員倒れていた。
「ったく、めんどくせぇな」
　そう呟きながら携帯を取り出しある人に電話をかける。
「あ、逆廻さん! どうされましたか?」
「おう、初春。ちょっと不良に絡まれて、その全員綺麗に伸びてるんだわ。あと処理頼む」
　電話をかけた相手は初春。なんでも彼女はジャッジメントと呼ばれる何でも屋みたいなもんだ。
「またなんですか?! 学校前にそんな事件持ち込まないでください! それにそこら辺は警

備隊にでも頼んでくださいよ！」
「だってめんどくさいだろ」
「はぁ…私から連絡を入れときますので場所だけ教えてください…」
「おう、サンキューな」
　電話越しでもわかる呆れたような声が届くが、とりあえず場所を知らせる。
「ところで、いい加減逆廻さんのｌｅｖｅｌを教えてくれたっていいじゃないですか。毎度簡単に不良達をあしらっているんですから、結構高いんですよね?!」
「あーたいしたことねーよ。そんじゃあな」
　適当に誤魔化してさっさと通話を切る。別にｌｅｖｅｌいくつかを伝えてもいいのだが、さんざん勿体ぶって反応を直で見たいのでわざと言っていないのである。
　ちなみにだが、さっきの会話でもわかる通り不良に絡まれるのは初めてではない。何故かよく絡まれるので毎度このやり取りをしている。まあ当然ほかの用件も多々あったりするので、邪険に扱われたことは無い。
　ちなみによく連絡をとったりしているせいで、向こうの周りでは「初春に春が来た！」と騒がれているらしいが十六夜は知らない。
　そんなこんなありながら学校に着いたので、とりあえず職員室に行き担任に会いに行こうとする。が、すでにわざわざ昇降口前で待ってくれていた。

「あ！逆廻ちゃんですね！」
「おう、そうだピンクロリ」
「む！私はピンクロリではなく小萌先生です！ちゃんとそう呼んでください！」
「そうかピンクロリ」
「もぉぉ！」
　俺の担任はこの目の前にいるどう見ても小学生の小さな女の子である。だが、これでも成人しているというのは本当に驚きである。どんな遺伝を持っているのだろうか。出会ったその日になにかの能力かと調べてみたものの、確実に無能力者である。まあ元の世界でも歳を誤魔化しまくってる姿をしたロリは多くいた事だしあまり気にしないようにしよう。
「ふん！とりあえず、みんなに紹介しなければ行けないので教室に行きますよ！」
　はいはい、と適当に答えながら。ぷんぷんしながら歩いていくピンクロリの後ろをついて行く。
　ピンクロリが止まった教室はまだワイワイ騒がしい一年七組。上条当麻と同じクラスである。まあ同じクラスになるように頼んだのだから当然といえば当然か。
　そこら辺はｌｅｖｅｌ５なので多少の要望は聞いてくれた。
「それでは、紹介があるまで待っててください」

と言うと、みんなから見えない死角に立って紹介の時を待つ。
「はーい皆さん。席についてくださいねー！おはようございます。今日は新しく転入生が来たので紹介するのですよー！」
「男ですかー？女ですかー？」
ピンクロリが入るとさっきまで騒がしかった声がやみ、転入生が来ることを伝えている。そしてありきたりな質問も飛ばされている。
「ふふ、もう扉の前で待ってくれているの呼びますね。入っていいですよー」
入室の合図が出たので普通に開けて入る。本当は蹴破りたいのは山々ではあるが、さすがに第一印象からドン引きされても困るのでなるべく自然を装う。
入室すると、金髪だーやら男かーやら、イケメンだわー、みたいな声が聞こえてくる。
「ってお前、十六夜じゃないか！」
そして一際大きな声で、椅子から立ち上がってこちらを指さすつんつん頭の当麻がいた。
よっ、当麻。と軽く返し教卓の前に立つ。
「ご紹介に預かりました、逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子揃ったダメ人間ですので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してください紳士、お嬢様方？ちなみに取扱説明書が欲しい奴には作ってくるぜ」

と、いつぞやの自己紹介をそのまま丸パクリで使う。
だが、クラスのみんなからはかなり丁寧な態度をとったせいでちょっとした冗談だと軽く受け流されている。
「それじゃあ逆廻ちゃんは上条ちゃんの後ろの空いてる席にお願いねー」
アハハと軽く苦笑いしながら一番後ろの席を指されたので、そこに荷物をもってドスっっと勢いよく着席する。
「それでは、これか仲良くしてあげてくださいねー」
そう言うと一度ピンクロリは教室を出ていく。
そして転入生恒例の質問攻めが発生する。
「なんで金髪なの？」
「地毛だ」
「彼女いる？」
「いない」
「なーなー！能力は持ってる？」
「あー身体強化なんじゃね」
「だとしたらｌｅｖｅｌいくつなんだにゃー？」
「５だな」

「かみやんとはいつから知り合いなんだー」
などと簡単な一問一答が始まり、適当に返していく。
そしていつから知り合ったか、という質問に対して応えようとすると突然みんなが固まる。
「どうしたお前ら」
思わず尋ねてみると、当麻が恐る恐る口を開く。
「お前って…ｌｅｖｅｌ５だったのか…？」
「そうだよ、ま、最下位とかいう気に入らねえ順位を渡されたがな。知らなかったのか？」
わざとそんな風にいうが、当麻にもずっと隠していたので知らないのは当然のことである。
「知らねーよ!!確かにｌｅｖｅｌ５が増えたとは聞いてたけど十六夜のことか?!」
瞬間さっきの静まりが嘘のように、最初よりさらに騒がしくなる。
ーまじで?!
ーなんでこの学校に？
ーｌｅｖｅｌ５って初めて見た…
など色々言われる。

「あーめんどいからそんな広めようとすんなよ」

そんなこんなで俺の学校生活が始まった。

一週間でクラスのみんなと打ち解けたり、めんどくさいと思いながらも勉強を教えたりなど、割と真面目な生活を送る。

きっと元の世界に転生させられた当時ならもっと問題児として名を覇しただろう。

まあ、一週間で何回か呼び出しをくらってはいるが…

不幸と幸運

気が付けばもう七月の中盤でもうそろそろ夏休み…か。
そんなことを考えながら街を散歩する。
すでにこちらに来て四ヶ月近く経過したが割とあっという間だったな。
ここは俺が生まれた地球なんかより、神秘に満ち溢れて毎日が飽きないのだから。
元の世界に戻る方法は見つかってはいないが、もう少しこの世界を堪能しても誰も文句を言わないだろう。
それに、あくまで予想ではあるが、いつ元の世界に戻ったってあまり変わらない気がする。
その理由だが、そもそも前の世界に呼ばれたのは俺の他にもう二人いた。そしてそれぞれが異なる時間軸から召喚された。もしくは別世界線から召喚されていたのではないかとも思う。そこから考えるに、ここで過ごした日数がそのまま向こうの世界と同じだけ時間が経つとは考えられないのだ。もしかしたら俺がいなくなってから数分後に帰れるかもしれないし、数年後になるかもしれない。なのでここでいくら慌てても無駄である。

どうせまだ戻れないならここで得られる経験、知識を全て盗んでからでも遅くはないだろう。

（ま、とりあえずこの学園のｌｅｖｅｌ５に会っていきたいところではあるな）

「あ！逆廻さーん！」

考え事をしながら歩いていると、ふと道の反対側から俺の名前を呼ぶ声が聞こえたのでそちらを振り向く。

「あ？初春か」

こちらの姿に気付き手を振る初春がいた。そして傍には他に三人の女子生徒がいた。三人とも、この学園にいる全員の学生データ、確か書庫（バンク）と呼ばれるもので見た覚えがあるな…

ｌｅｖｅｌ０の佐天…ｌｅｖｅｌ４の空間移動（テレポート）白井…？それであと一人は…ってオイオイ。なんで見た瞬間気付かなかったんだ？アイツはｌｅｖｅｌ５第三位の超電磁砲（レールガン）の御坂美琴じゃねぇか。

会いたいと思ってる側から見つけられるなんてラッキーだなほんと！

どんなやつか話してみるか。

「こっちに来てくださーい！」

初春からも呼ばれるので、道路を軽く飛び越えていこうとジャンプする準備をする。

ガッシャーーン
が、突如進行方向右手側にある閉まっていたはずの店のシャッターが爆発する。
「逆廻さん?!」
俺は一瞬にして爆発に巻き込まれ、辺りからは悲鳴などが聴こえる。
(前言撤回。何がラッキーだ。アンラッキーにも程があるぞ…誰だこんなことをしでかした馬鹿は…)
冷静に怒りながら爆発の被害にあわされた店、銀行を見る。
「へへっ、ここはチョロかったな。おい!さっさと逃げようぜ!」
「でも、なんかいまこの銀行前に人がいなかったか?」
「ああ?だとしても気にすんなよ。今はとりあえず逃げるぞ!」
爆発と同時に銀行の中から、いかにも銀行強盗らしい三人組が出てくる。
そして煙のせいで俺に一切気付くことなく逃げ去ろうとする。
「ってちょっと待てやオラァァァ!!!」
服が少し破けるものの、無傷の十六夜は自分の体にあたって足元に落ちたシャッターの破片を拾い上げ、すかさず三人組の少し手前の地面を壊すように投げつける。
また大きな音を一つたて、あたりの人もよりいっそう騒ぎ出すが今は関係ない。
「あ、んだおめえ。俺たちの邪魔すんじゃねえ。殺すぞ?!」

「俺に喧嘩を売っておいて無視とはいい度胸じゃねえか…一人残らず潰してやるからかかってこいや!!」

すると、少し太った男が拳を掲げて走ってきた。

「学生は大人しく家に帰りな!」

大きく振りかぶった拳がこちらの顔面を殴り飛ばそうと迫ってくる。が、たかが一般人の攻撃など俺からしたら遅すぎる。

紙一重で体を左足を軸に右回転させながら攻撃をかわし、勢いをそのまま利用して一回転し右足の踵を太った男の脇腹に入れ銀行の中へと蹴り飛ばす。殺さないギリギリまで手加減したが、男は勢いよく店内へと突っ込み壁に当たって盛大な音をたてる。

「はっ!ダラしねえなぁ!もっと俺を楽しませろやぁ!」

「っく、調子に乗ってんじゃねえぞ!!」

今度は髪の毛をあげてる男がこちらと対面する。そして突然右手を前に出し、手のひらを空に向けて開いたと思ったら、そこに炎が生成される。

「発火能力者(パイロキネシスト)か」

「ああそうさ!そして俺はｌｅｖｅｌ３。お前が一体どんな能力を持っているかは知らねぇが俺の炎で燃やしてやる。今更泣いて謝ったって許さねーぞ!」

男は怒りを思いっきり顕にし能力の強さまでわざわざ教えてくれる。てか戦いの途

中で能力を出してくるならまだしも、こんなお互いに止まってる状態で作り出すとか…
どう考えても炎で攻撃しますよって合図じゃないか…
もしかしてこいつら馬鹿なのか？
「くらいやがれ!!」
右手に集まった炎を玉のようなな形にしてこちらへと投げ飛ばしてきた。
真正面からの攻撃などかわしてくださいと言っているようなものだ。
だが、
「しゃらくせェ!!」
誰が避けるなんて情けないことするか。元の世界にいた炎を扱うヤツらなどこんなものの比ではない。正面からその炎を殴って消し飛ばす。
「な…んだと…」
固まっている発火能力者に、そのまま殴り飛ばそうとゆっくり歩いて近付くと突然ツインテールの女。白井黒子が目の前に現れる。
そして流れるような体捌きで男を転ばし、能力を使って地面に縫い付ける。
「オイオイ、これはアイツらが売って俺が買った喧嘩だぞ。邪魔すんじゃねーよ」
正直こんな小物どうでもいいのだが、突然獲物を横取りされたことに軽く怒ってますよアピールをする。

「ジャッジメントですの！こういった事件は私達が本来対応すべきなので殿方は大人しくしていてくださいませ」
「しゃーねーな」
　こうなっては仕方がないと、元々興味も失せていたので簡単に手をひく。大人しく初春の方に合流しようと目を向けると、いつの間にか目の前から逃げていた犯人の1人が男の子を盾にしようと連れ去る直前だった。しかし、それを必死に止めようと初春が子供の胴体をしっかりと掴んでいるのが見えた。
「くっ！離しやがれ！時間がねえんだよ！」
「絶対に嫌です！」
　少しの間子供の引っ張りあいをするが、男の方が痺れを切らして初春の頭を蹴り飛ばしながら逃げていく。
　その光景を見た俺はついにキレる。
　今まで、さほどこの銀行強盗たちのことについては怒っていなかったのだが、仲間が手を出されたと言うなら話は別だ。
「くろｋ…?!」
　どうやら御坂も頭に来たらしく、手をだす許可をもらうために声をあげようとしたっぽいが、俺の放つ威圧で黙る。

「…オイ風紀委員。さっきは引き下がったが前言撤回だ。俺がやる」

一度、前の世界でも仲間が重症を負わされた時もキレてたな。『強きを挫き、弱きも挫く』というもう一つの座右の銘など今じゃ全然当てはまらないな、なんてことを一瞬頭で考えながらも、逃走しようと車に乗り込む犯人にゆっくりと近付く。

男は逃げ去ると思っていたのだが、己のプライドがそれを許さないのか、車に乗ったまま突進してきた。

「逆廻さん危ない?!」

初春から心配する声が聞こえてくるが気にしない。たかが車ごときが俺を殺せるわけないのだが。

「オイこの野郎。よく覚えとけよ。俺の仲間に手を挙げたやつは誰であろうと許さねえぞオラァ!!」

突っ込んできた車体の地面と並行になる面に軽く足を当て、思いっきり上空へと何回転もするように蹴り上げる。

男と車は空高く飛んでいき、上空を数十秒飛んだ後、重力に従って先のスピードよりも加速している車体が落ちてくるので、それを片手で受け止める。

「いっぺん死ぬような思いをしてどうだったか?次もし同じことをするならその時は命かけろよ」

ドスの利かせた声で威嚇していたが、男は既に気絶していた。
「ったく」
手で服についたホコリを払おうとする。
「逆廻さん!!!」
が、その前に涙目の初春がこちらに近寄ってきてその手を奪い取る。
「お、お怪我はありませんか?!」
「ねーよそんなもん」
良かったーと目の前で安堵したあと、俺の手を無意識に握ってしまっていたことに気付いたのか、急いで手を離して顔を赤くする。
忙しいやつだなコイツ。
「へーあんたが初春の言っていた男かー」
すると今度は御坂や佐天が近寄ってくる。
「どうも、逆廻十六夜です」
わざと丁寧そうに言っていることが相手に伝わるような態度で自己紹介する。
「私は御坂美琴。よろしく」
「あたしは佐天涙子です」
ま、知っているがな。と内心で思いつつも右手を差し出されたので握手をする。

「噂には聞いてるわ。あんた、相当強いでしょ。ｌｅｖｅｌいくつなの？」
その話に、さっきまで一人アワアワとしていた初春も顔を近付けてくる。
ま、そろそろバラしてもいいか。
「じゃ、もう一度自己紹介させてもらうぜ。ｌｅｖｅｌ５、「正体不明（アンノウン）」逆廻十六夜だ。よろしく」
軽く一例すると三人がぽかんと固まる。
「え…え？ｌｅｖｅｌ５って、逆廻さんがですが？」
「二度も言わせるな。そうだよ」
最初に口を開いたのは初春だった。予想通り口をパクパクと面白い反応をしてくれる。
「あ、あんたが最近増えたｌｅｖｅｌ５っていうの？」
「それで間違ってないぜ」
次に口を開くのは御坂。まあ今まで都市伝説になりつつあったのだから仕方がないことでもあるか。
「な、なんだよ初春…あんたｌｅｖｅｌ５にもう会ってたんじゃん…」
「そ、そんなこと知りませんでしたよー!!」
三人の反応にヤハハハと笑いながらそれを眺める。

（やっぱり今日は、ラッキーだったかもな。面白いもんも見れたし）
「ねーあんた「名乗ったんだから名前で読んでくれ」…逆廻、正体不明ってどういうこと？全然能力が分からないんだけど」
「その名の通り正体不明だ。機械ごときが俺の能力を測定できるわけねーだろ」
「で、でも身体強化系って言ってましたよね?!」
「あながち間違ってねーだろ」
　そんな質疑応答をしていると、突然目の前に先程の風紀委員の女子生徒が現れる。
「お・ね・え・さ・まあああああ!!」
「ちょ!!何する黒子!!」
　そしてそのまま御坂へと抱きつく。百合か…
「酷いですわお姉様！私が一人で後始末をやらされてるなか呑気に談話なんて！少しは黒子のことも気にかけてくださいませ！」
　この白井という女。予想以上にめんどくさそうなやつだな。空間移動で一瞬にして目の前に現れるわ、すぐさま御坂に飛びつく。
　なんだか白夜叉と似た雰囲気を感じるので、もしかしたら仲良くなれるかもしれないが…
　御坂がしつこい白井に我慢の限界が来たのか、電撃を思いっきり浴びせる。するとよ

うやく普通に戻る。
「で、こちらの事件に関わっていた殿方は誰ですの？」
「ｌｅｖｅｌ５の！逆廻十六夜さんです」
　初春がやたらｌｅｖｅｌ５のところを強調して紹介してくれる。これぐらいで根に持つなよ。
「へー、あなたが…私は白井黒子と申します。以後お見知りおきを」
　ちょこっとスカートを摘んで丁寧にお辞儀してくれる。意外と御坂さえいなければ礼儀正しいやつなのかもしれない。
「ねー逆廻。ちょっと勝負しない。私自分以外のｌｅｖｅｌ５と本気で戦ったことがないのよ」
　さっきから妙にそわそわしている御坂が挑戦的な態度で周囲に軽い電撃を放ちながら喧嘩を売ってくる。落ち着きがなかった理由はそれか。まさか向こうから喧嘩を売ってくるなんて願ったり叶ったりだ。
「イイぜ。俺もｌｅｖｅｌ５には興味があったんだ」
「あら、どこぞの誰かさんと違って随分気前がいいじゃない」
　予想だが、どこぞの誰かさんとは当麻のことではないかと思う。最近マンション出会う時なんだか焦げ臭い匂いをしている時がたまにあるからだ。あいつ、こんなところで

もいい役を奪い取ってるんだなと軽く嫉妬するが、今は俺に敵意を向けてきてくれているので気にしないことにする。
「ってちょっと待ってですのおお!!」
一触即発の雰囲気の中白井が間に割って入ってくる。
「んだよ。今いいところだから邪魔すんなよ」
「そうよ黒子。私も今テンション上がってきてるの。邪魔しないで」
「だからそれがダメですの!!良いですか御二方!ただでさえ能力を使うことなど禁じられているのに、ましてやｌｅｖｅｌ５同士の衝突だなんて絶対に許されないですのよ!!」
「別に許して貰わなくていいぞ」
「ダメですのおお!そもそもなんで会った瞬間から御二方とも好戦的なんですの?!」
「理由なんてないわ。ただ戦いたいだけよ」
白井…第一印象はめんどくさそうだとか思ったが、もしかしたらボケもツッコミもいける万能中学生なのかもしれない。評価を改める必要があるな。と頭の中で考える。
結局のところ今回は戦わないということでまとめられた。口論で負ける気などさらさらないのだが、流石に街中でやると一生目をつけられそうなので仕方がないとは思う。

「しょうがないわね。また今度にしましょ」
「そうだな」
「出来れば今後将来戦わないで欲しいのですけれど…」
矛を収めた俺と御坂は先程の雰囲気など嘘のように大人しくなる。白井に至っては少し髪が乱れていたが。
「びっくりしたぁ…突然戦い始めるのかとひやひやしましたよ」
「あたしもだよ…ｌｅｖｅｌ５同士の戦いとか流石に恐ろしい…」
「ごめんごめん二人とも」
「悪かったな」
御坂に合わせて俺も上っ面だけの謝罪をしとく。
結局その後は五人で仲良くお喋りをしたあと、別れ際に全員でメアドを交換して解散となった。
厄介事に巻き込まれる災難も合ったが、結果的に良い一日だったなと満足して帰る十六夜であった。

逆廻爆発事件

「あ、食材がねぇ」

時は7月17日の夕方。そろそろ晩御飯の準備でもするかと思い冷蔵庫を開けたのだが、中はすっからかんだった。いつもなら毎日適当な時間にスーパーとかに言って食材を買ってくる。だが、昨日は事件に巻き込まれたり、友好関係が増えたりと色々あったせいで買い忘れ、夜に残りの食料全てを使ってしまったのだった。

ちなみに今日は、朝飯はとらず、昼食も学食を食べたので問題がなかった。放課後はというと昨日のことについて色々調べ物をしていて買いに行くのをしなかった。いつも少し多めに買い込んでいたので、今日ぐらい買い出しをしなくても大丈夫だろうと、すっかり思い込んでいたため買いに行くことをしなかったのだ。

「しゃーねぇ、買いに行くか」

家を出てから店に行くまでの間、特に何も起こらず無事にスーパーにたどり着いた。そして適当に、同じ過ちを繰り返さないよういつもよりさらに多くの食べ物を買った後、店の外にでる。

帰りも特に何もなく、家までもう少し、というところで道端にあった新品のうさぎの

人形が落ちてることに気づく。
「なんだ?誰かの落とし物か?」
　そもそも、学園のあちこちにお掃除ロボットがいて、ここの付近にも例外なく置いてあるはずだ。それなのに人形が落ちているということはまだ近くに人形の持ち主がいるのだろう。
（めんどくさいが、ま、たまにはいいか）
　適当に風紀委員にでも押し付けるか、と考えながら人形を拾い上げるとまた歩き始める。が、数歩歩いたところで突然人形が不気味に変形し始める。
（なんだ、なにかの能力か?）
　先に食料を地面に置いたあと、人が密集していないところに移動し、すかさず人形を離して地面に落とそうとする。が、その前に人形は爆発を引き起こし、俺はそれに巻き込まれる。
　突然の爆発に対し、周囲の人間も慌てて距離を取り爆発した方を見守る。
「ツケホ、誰だこんな爆弾置いていったアホは…」
　きっとｌｅｖｅｌ３かｌｅｖｅｌ４の量子変速（シンクロトロン）か。はたまたテレポートで人形内に爆発寸前の爆弾を潜り込ませたか。元々入ってた爆弾を何かしらの能力で発動させたか。まあそんなところだろう。

どれにしても随分質の悪いやつだ。
（ぜってぇ犯人捕まえてボコる…）
そんな決意をしておく。
ちなみにあたりからは、
ー今爆発があったぞ。とか、ーなんであいつ無傷なんだ。など野次馬がいっぱい集まってきていて正直鬱陶しい。
騒ぎが大きくなる前にさっさと離れるか、と食材を回収し離れようとしたところで目の前に見覚えのあるツインテール女が現れる。
「ジャッジメントですの！爆発があったのはここですか？って、あなたは…！」
「よっ、白井。てかなんでここに居る」
昨日会ったばかりの風紀委員だ。誰かが爆発が起こった瞬間に通報したのだろうか？にしても来るのが早すぎだろ。
「たまたま近くを歩いてたら爆発音が聞こえたので、急いで来たんですの」
なるほど、合点がいった。要は運悪く逃げる前に捕まったのか…
「もしや、貴方がやったんですの…？」
「ちげーよ、落ちてる人形拾った結果がこれだ」
ジト目で睨まれるも、俺は本当に何も問題を起こしていない。それに俺の能力じゃこ

んな被害状況にはならない。
「冗談ですの。どうやら最近発生している事件に巻き込まれたみたいですわね。話をしたいのでついてきてくれますの？」
「ヤダ」
「ついてきてもらいますの!!」
結局俺は、無理矢理能力によって連行され、色々と事情聴取を受けた。なんでも重力子を加速させることで爆発を引き起こす。という事件が最近発生しているらしい。最初は小規模だったのだが、今では俺が実際被害にあった通り、普通の人間なら人一人を簡単に重症にする威力まで進化しているらしい。その後も色々話したあと、すっかりあたりが暗くなった頃に開放された。てか帰りも能力使って帰してくれよマジで。
しばらく歩いた後ようやく家の扉の前に辿り着き、鍵を開けようとしたところで誰かが近付いてくるのに気付く。
咄嗟に振り向くとボロボロの当麻がいた。
「なんだ当麻か」
「あ、十六夜。ってこのこの上条さんの姿を見て何も思わないのでせうか?!」
「いつものことだろ」
「不幸だ…」

こんな時間まで一体何をしていたのだろうか…
いや、どうせ御坂に追いかけ回されていたのか。
「あー折角だから飯一緒に食うか？今から作るから遅くはなるが、どうせお前飯ないんだろ」
「あなたが神か?!」
「デジャブはやめろ」
色々家の前で騒がれたあと、鬱陶しいので部屋の中へ蹴り入れると、家の鍵を閉めて早速料理を開始する。
「イテテテ、てか十六夜って料理出来たんだな」
調理していると突然当麻が声をかけてくる。
「あ？まあな」
「意外だな。いつもの行いからは考えらんないな」
「なんだよいつもの行いって」
「例えばこんなことあったじゃん」
ー回想ー
これは、とある十六夜が転入してきた数日後の学校生活の朝に起こった話である。
「はーい！朝のホームルームを始めますよー！席ついてくださーい」

小萌先生がみんなに声をかけて着席を促すので、この俺、上条当麻も席に座る。
「あれ、今日は逆廻ちゃんは休みですかー？」
それを聞いて後ろを振り向く。そういえばいない。いつも遅刻しない程度に来てるはずなんだけどな。
風邪でもひいたのか？
「上条ちゃんは知らないですか？確か家近かったですよね？」
まあマンションの隣なんだからかなり近い。でも知らない。
「わかりまｓ
パリーン。ガッシャーン。
突如、誰も近くに居ないはずの、一番後ろのベランダ側の窓が大きな音をたてて粉砕する。恐る恐る後ろを振り返ってみると、そこには見覚えのある男がいた。
「あ、ピンクロリ。遅れてすみません」
「あ、おはようござ、じゃないですよ?!何してるのですか?!」
「あ？ちょっと朝忙しくて遅れました」
「遅れた理由じゃなくて、窓から来た理由を聞いてるんですーー!!」
やれやれ、と言った感じにベランダで服についた硝子の破片を軽く払って落とし、さも何も無かったように席につく。

「いやいやいや何してくれちゃってるのでせうか?!」
　え、何この隣人。こんな恐ろしい子なの?!いや、思い返してみれば自己紹介で粗野で凶悪って…
　まさか冗談じゃなくて、事実だったのか?!
「さかやんってだいたんだにゃー…」
「修理費は出すから気にしなくていいぜ」
「そういう問題じゃありません!窓から来るのはやめてください!」
　ー回想終了ー
「しかも、それ以降遅れた時には、窓からじゃなくて天井突き破ったり、壁壊したりしてたじゃん…」
　そういえばそんなこともあったな。ヤハハハと笑う。
　ちなみにだが、何度か呼び出しをくらっている理由もこんな感じの内容のせいである。
　当麻はため息をつきながら、気にしてはいけない。と呟いている。
「ほらよ、時間ないからステーキにしちまったぜ」
　料理も出来上がったので二人分の料理を机のうえに並べていく。その出来栄えは、見た目だけでいうと高級な店で出されるような見事な出来である。

「これ、本当に食っていいのか…？」
「いいから作ったんだろ」
香ばしい肉の匂い、溢れる肉汁。そして綺麗に添えられた人参などの数々。当麻はゴクリと喉を鳴らしている。
「いただきます!!」
そしてガツガツと勢いよく食い始めたので、俺もいただきますと小さく呟き食べ始める。
「うめぇ！まじうめぇ！これで金儲け出来るぞ！てか毎日作って欲しい」
「そういう言葉は女に言え気色悪い」
当麻は罵倒も気にせずどんどん食べ進めていく。少ししてようやく落ち着いて食べ始めたと思ったら、声をかけられる。
「なあ、十六夜はなんで今日遅かったんだ？」
「昨日に引き続き今日も爆発に巻き込まれた」
「へー…って爆発?!しかも今日もって?!」
食べる手は休めていないが、こちらの顔を向きながら聞いてくる。ご飯が飛ぶからやめろよこいつ。
「まあな、それで今日は事情聴取された」

「お前もなんだかんだ苦労してるんだな」
と同類を見るような目で見てくる当麻。まあ、お前と違って不幸と思わず楽しんでるがな。なんて頭の中で思う。
その後、ご飯を食べ終わり何度も礼を言ってくるので、明日食材を買う手伝いをしろ。ということでこの借りはチャラにすることになった。
当麻と別れたあと今日の出来事について軽く調べたあと、眠りについた。
ー翌日ー
「いやぁ、昨日は久々に贅沢をしたなぁ」
「ほんと当麻の金欠にこの俺も恐怖するわ」
俺は約束通り学校の帰りに当麻と買い出しに行く。
今日は昨日に引き続き天気がいい。そのせいで少し気温が高く汗を軽くかきながら歩く。
「バーゲンまでまだまだ時間があるな…」
「お前マジどんな生活してるんだ」
「あれ、あの子どうしたんだろ」
「話を聞けやオラ」
話の途中で突然当麻がセブンスミストの店前で今にも泣き出しそうな少女を見つけ

て駆け寄っていく。
　ほんとお人好しのヒーローなこった。と思いながらあとを歩いて付いていく。
「んで、どうした？」
「この子目的の店内の行きたい服屋がどこにあるか分からないみたいなんだ」
「へー」
　1人でここまで来ただけでもすごいな、なんて関心をしながら話を聞く。
「時間もあるし案内してから買い物でもいいか？」
「ま、イイぜ」
　予想通り、いつものお節介上条くんになった。まあ断る理由もないので了承した。多分俺が拒否しても、当麻のことだから一人で道案内をしていたとは思う。
　俺が付いていくと決めた理由は、ガキが可哀想というのもあるが、こいつと一緒にいると楽しい不幸体験を出来る、または見れる。というしょうもない考えである。
「あ、逆廻さん！」
「ん？初春に佐天か」
　色んな服屋を見回っている途中、水着を見ていたであろう佐天と初春がこちらに気付き手を振ってくる。
「あ、どうもですー」

「逆廻さんはどうしてここにいるんですか？」
「ここに来るのに服を買う以外の理由はないだろ。と言いたいところだが、今は俺の連れと迷子の道案内中だ」
と親指で後ろにいる当麻とガキを指差す。
「って、昨日のカバンの女の子ですね！」
「あ！昨日のお姉ちゃんだ！」
なんだこいつら知り合いだったのか、と思いながら仲良く喋るのを見守る。あ、いいこと思いついた。
二人が話している間にある物を取ってくる。
「あれ、逆廻さんは？」
「ここにいるぜ。ほらよ」
そしてとってきたものを受け渡す。
持ってきたのは白いビキニだ。
「な、なんですかこれは…？」
「お前用の水着だ！」
プルプルと赤い顔をしながら訪ねて来たので、俺はサムズアップしながらいい笑顔で答える。

「こ、こんなの着れません!!」
「えーあたしもいいと思うんだけどなぁ」
そこに悪ノリしてきた佐天が会話に入ってくる。
「い！いやです！絶対着ませんから！」
ワーワー騒ぐ初春を佐天と弄る。少しして適当になだめた後、そろそろ行くか、と話を打ち切る。
「あ、向こうに御坂さんもいますよ」
佐天が指さしながら言ってくるので、指を指した方向を見るとすごい顔でパジャマを見つめている御坂がいた。何やってんだアイツ…
「そうか、まあ声だけかけていくか、じゃあな」
とお互い手を振って別れの挨拶を告げる。
さて、あいつは何をしているんだか。
先に行って来いと、指で当麻にゴーサインをだす。
すると、当麻は頷いて一足先に御坂に近づいていく。
やたら子供っぽいパジャマを自分の体に当て、鏡に映る自分を見てサイズを確認しているところに、当麻も鏡に映り込む。
軽く意味ホラーだな。

「なにしてんだよ」
「な！なんで貴方がここにいるのよ！」
当麻の存在に気付き、突然のことで驚いた御坂がパジャマを隠しながら慌てて振り返る。
いや、隠せてないから。
「いちゃいけねーのかよ」
「よっ」
「常盤台のお姉ちゃんだー」
「さ、逆廻にカバンの子もいたのね」
冷静さを取り戻した御坂はいつも通りな態度に戻る。
「で、ここで何してるのよ」
それを最初に聞いたのは俺らだがな、と思いつつ、当麻が理由を説明してるのを特に口出しせずに聞く。
二人が仲良さげに話しているのを黙って暖かい目で眺める。
「ねーねーお兄ちゃん！あっちみたい！」
そんな話し合いも、痺れを切らしたガキが別の場所にある服屋を見に行きたいらしく、当麻の服を引っ張って連れていこうとするので、適当に別れを告げてガキについて

行く。

ーーー

その後も色々と歩き回ったあと、ガキは満足したらしくこちらにお礼を言ってくる。

「お兄ちゃんたち！今日はありがと！」

「おう、満足したか」

「うん!!」

今度からはあらかじめ調べてから来いよ、と助言を残して別れを告げ、目的も達成したことなので店の外へと向かう。

「さて、そろそろ買い出し行くか」

「あ、そうか」

「当麻…お前忘れてただろ…」

「い！いやいや！忘れてないですよ！」

全くこいつは、と思いながら歩いていると、突然館内のアナウンスが鳴り始める。

「お客様にご案内申し上げます。現在、電気系統の故障が発生したため、誠に勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます。」

へー、こんなこともあるんだなと考えながら店の外へと素直に向かう。

が、途中で立ち止まる。

「どうした？」
当麻が突然のことに声をかけてくるが無視して推測を始める。
（待てよ。さすがにこれはおかしいだろ）
本当に、電気系統の故障で営業を終了させるのだろうか。そんなことせずとも、客は一切そのことに気付いていない。なら、こっそりと大事にせずにことを済ませればいい話。
つまりは何か事件があったのだろう。
例えば、予め察知できる。昨日と同じ連続爆弾魔の犯人とか…
「おい当麻。少し用事を思い出した。先で外で待ってろ」
「え、用事って」
「いいから先行ってろ」
何か言い出す前に出口とは逆方向に走る。
多分これだけ迅速な対応が出来たということは、風紀委員。つまりこの店にいた初春に何かしらの情報が渡ったのだろう。
まずは初春を探すか。
あたりを破壊しない程度の速さで探し回る。
すると、館内の道の中央で立っている初春を見つけた。

「よお、初春」
「？って逆廻さん？どうしてここに?!」
「面白いことしてるなら俺も混ぜろ！」
「面白いことなんてないですよ！早く避難して…「お姉ちゃーん」
口論をしていると、突然さっきまで道案内をしていたガキが何やら変な人形を抱えてこちらに近寄ってきた。
それと同時に、別方向の遠い場所から当麻と御坂が走ってくるのが見える。
先にこちらに辿りついたのは、人形を持ってきたガキだった。
なんか、知らない男の人が、初春に渡せと頼まれたらしい。
普通自分で渡せばいいだけの話だし、突然こんな場所で人形の贈り物って…
待てよ、人形？
…?!
昨日俺も人形を拾って爆発に巻き込まれたのを思い出す。
そうか、人形を渡したのは犯人の仕業。そして今回狙ったのは初春か…!!
「おい！すぐにそれを捨てろ!!」
「え？」
咄嗟に声をかける。初春は一瞬呆けたあと、人形の以上に気付きすかさず投げ捨て

る。

「あれが爆弾です!!」

初春も勘づいて、ようやくたどり着いた御坂と当麻に伝える。そして、それぞれが爆弾をどうしようかと動き出す。

御坂はなにかしようとポケットからコインを取り出し、焦ってそれを落とすのを視界の端で確認、上条はみんなを庇うように右手をかざしながら飛び込んでくる。

多分見たことはないが、御坂は超電磁砲で爆弾を消し飛ばそうとしたのだろう。そして上条は右手で能力を打ち消す考えか。

本当に右手で爆発を防げるか？爆発する前に人形を触れば、確実能力は打ち消せるだろう。だが、能力によって発生した爆発、爆風まで防げるのだろうか。そんな不確定要素に身を任せる訳にはいかない。

「御坂！電気で壁を作れ！」

それだけ言うと、御坂が咄嗟に電気を作り出すのを確認する。さすがはｌｅｖｅｌ５だな。すぐさま地面を踏み切り地面を抉って飛び出す。地面が軽く抉れたことで発生した石の礫は御坂が上手く撃ち落としてくれる。

すぐさま人形を掴み、さらに地面を蹴って加速しデパートの壁をぶち破って外に出る。

（あの時は周りに人がいたうえに、何が起こるか分からなかったから間に合わなかったが、今回は違ぇぞ爆弾魔!!）

外に出た後みんなが突然の出来事にこちらに注目しているにのが分かる。

俺は取り敢えず、爆発を思いっきり上空に投げ飛ばし、間一髪で爆発を逃れる。

一先ず危機は去ったがまだ終わってねぇ。

集まった人達を全員上空から眺める。

すると、みんなが安堵の顔などを浮かべている中、一人だけでこちらを恨めしそうに見ている大きなバッグを持った男を見つける。

（あいつか。やっぱ犯人は結果だけ確認しに残ったままだったか）

急いでその場を離れようと路地裏へと逃げて行く犯人を完璧に捕捉し、地面に着地した後、周りを気にせず急いで追いかける。

「おい待てよ」

「?!」

走る速さが圧倒的に違うせいで一瞬で追いついた。こいつか…俺に爆弾を2度もプレゼントしてくれたやつは

「ま、待て!落ち着け!悪かった!俺が悪かった!」

すると、男はすぐにバッグを地面におき土下座してくる。

「はぁ」
　思わずため息をついて臨戦態勢を解く。そんなアホみたいな手が通じる分けないのだが。てか基本的にこういった態度をとるやつは自分が相手より劣っていることを悟り、負けを認めたということだ。相手にするまでもない。
「かかったな馬鹿め！」
　案の定バッグに入っているアルミでできた物質をこちらに投げて爆発させてくる。
「はっはっは!!ざまあみろ!!」
「あーそれで終わりか？」
　当然無傷。一度くらって、一切ダメージがなかったので当たり前である。
「なっ、化け物か?!」
「生物学上ちゃんと人間だ。それと、分かってるよな？これだけのことをしておいて許されると思ってんじゃねえぞオラ!!」
　地面に転がっていた石を蹴り飛ばす。
　すごい早さで飛んでいく石は、男の顔スレスレを横切り路地の突き当りの壁まで飛んでいき、壁を粉砕する。
「ひ、ひぃ」
　耳をかすらせるつもりだったが僅かにそれたか。

「ちょっと待った!!」
「ああん?」
突如として、もう一回同じことをしようとしたところ、後ろから声をかけられたので振り向く。するとそこには御坂が立っていた。
「私もこいつに用があるの。あんたにも要はあるけど、今はこいつ。私にくれない?」
少し考えたのち、俺は立ち去ることにした。
充分恐怖は与えたし、あとは御坂が何かするだろうと思ったからだ。
あと、元々は買い出しをしに来ていたのだから。
御坂の横を通りすぎて路地裏を出ようと歩く。
「ありがと」
礼を言ってきたので、特に視線を向けることなく手だけ振っておく。
路地裏を抜けると、そこには当麻が立っていた。
「おい!大丈夫か?」
「問題ねーよ。それより風紀委員に捕まる前にさっさと逃げるぞ」
「それもそうだな。バーゲンに間に合わなくなる!!」
こうして、無事事件は解決したし、俺の個人的な恨みも晴らすことが出来たので急いでその場をあとにして駆け出すのだった。

ま、翌日。連絡手段を渡していたことが仇となり、俺だけ呼び出されたのだが。